

AdvanceではなくBasicとしてのMicro therapy

Micro therapy for Basic not for Advance

日宇歯科医院
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科齶蝕学分野
辻本真規
Hiu Dental Clinic Institute
Department of Cariology, Nagasaki University
Graduate School of Biomedical Sciences
Masaki Tsujimoto



「緒言」

マイクロスコープが本格的に歯科に応用されて20年余りが経ち、日本においても10数年が経過した。日本顕微鏡歯科学会も設立から7年が経過し、歯科界全体のマイクロスコープに対する認識も年々向上しているものと考えられる。近年マイクロスコープを導入している歯科医院が増え、インターネットを閲覧するとマイクロスコープの使用を特長とする医院が増えてきている。また、動画投稿サイトなどでマイクロスコープを使用した治療を目にする機会もあり、マイクロスコープというツールの普及により歯科医師、患者双方の意識が向上し、より上質な医療、オープンな医療というものの需要が増えてきたように感じられる。

しかし、現在マイクロスコープが導入されている大学病院・歯科医院は全体の約3%程度とされている。その中には1人で複数のマイクロスコープを使用していたり、1台に対して数人が使用している大学病院・歯科医院などが含まれ、歯科医師全体に対する使用率は明らかではない。小塚らの報告によると、日本大学松戸歯学部で臨床実習を終了した学生へのアンケートでは、2004年度で83.7%、2005年度で88.5%の学生が将来マイクロスコープを使用してみたいと回答している。しかし、若手歯科医師がマイクロスコープを使用できる機会は限られていることが多く、興味はあるが勤務先にマイクロスコープがない場合や、マイクロスコープがあっても使用できる環境にないという場合もある。また、他のセミナーと比較してセミナー数は少なく、学習環境が整っていない。しかし、若手歯科医師がマイクロスコープを使用することにより、治療技術の向上に与える影響は大きいものと考えられる。私は幸い、学生実習～臨床研修歯科医師～勤務医とマイクロスコープを使用した診療を見学、介補、治療を行える環境にあった。

今回、私のマイクロスコープの使用状況、症例を提示し、卒後数年までのマイクロスコープ使用の現状と、マイクロスコープを使用することによるBasicな部分の学習、教育の重要性を報告する。

「症例」

根管治療：

感染歯質除去、GP除去、MB2探索、イスマス・フィンの処理、破折の確認

修復処置：

コンポジットレジン充填

歯周処置：

歯石除去

「考察」

マイクロスコープを使用する利点は『拡大・光源・記録』である。この三つの要素により、大学の授業、通常の治療における見学・介補では見ることのできなかつた病態の細部、実際の手技の細部を視覚化することが可能になる。このことにより、治療におけるブラックボックスが明らかとなり、治療における基礎である術者・見学者の病態への理解、手技における問題点の抽出が可能となり、治療に対する理解度が向上し、治療レベルのベースアップを可能にするものと考ええる。

また、今大会のテーマにもなっている「**Get Visual and Open Your Dentistry!**」が示すように、本学会の諸先生方が治療手技をオープンにし、日本顕微鏡歯科学会が主催する指導医の先生方を中心とした**Basic、Advance**のハンズオンセミナーを開催し、若手歯科医師を育成することにより日本の歯科界のレベルアップ、若手歯科医師の意識向上、また学会の活性につながることを考えられる。

「結論」

マイクロスコープは若手歯科医師の治療レベルのベースアップを担う重要なファクターであり、有用なツールであること、そしてマイクロスコープを使用する歯科医師のレベル向上には自己の努力の他に指導医によるセミナーが必要不可欠であると考ええる。